
原 著

生後2～3か月の児を育てる父親が日々の生活の中で悩んだ状況

鳳 崎 茉梨亜¹⁾, 葉 久 真 理²⁾, 竹 林 桂 子²⁾, 佐 藤 浩 子²⁾, 森 内 洋 美³⁾¹⁾元徳島大学大学院保健科学研究科助産実践コース²⁾徳島大学大学院医歯薬学研究部助産学分野³⁾徳島大学病院

(令和6年11月6日受付) (令和6年11月19日受理)

目的：生後2～3か月の児を育てる父親が、日々の生活の中で悩んだ状況を明らかにする。

方法：生後2～3か月の児を育てる男性を対象に、電話による半構造化面接調査を実施し、質的記述的に分析した。

結果：参加者は14名であった。生後2～3か月の児を育てる父親が日々の生活の中で悩んだ状況は、【日々変化する子どもへの対応】、【産後の妻との関係】、【父親になって変化した生活】であった。

結論：本研究結果で示された父親が悩む具体的な状況は、父親が自分自身のメンタルヘルスに留意しながら育児を遂行していくための一助になると共に、子育てに悩む父親支援事業の展開に貢献するものと思われる。子育ては、夫婦の相互理解と協働が重要であることから、日々の生活の中で悩んだ状況は、時間的余裕が持てない子育ての日々の中で、妻が夫を理解する一助となると考えられる。

キーワード (和文)：父親，育児，悩み

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、感染防止の観点から、妊娠期の集団指導や立ち会い分娩、面会の制限や中止など、家族を含めた妊産婦や褥婦への継続ケアが十分展開できない状況が続いた。

コロナ禍では、児童虐待やドメスティックバイオレンス、女性の自殺が増加し¹⁾、産後の女性のメンタルヘルスへの影響は大きかったと推察される。この産後の女性のメンタルヘルス支援では、産後間もない時期の健診や、産後ケア事業が全国展開され母子に対する支援が強化さ

れている。

また、女性のメンタルヘルス支援強化の1つとしてパートナーである男性には、イクメンプロジェクト(2010年発足)やさんきゅうパパプロジェクト(2015年発足)、健やか親子21等の取り組みにより強力に育児参画が推進されてきた。その結果、父親が積極的に育児を行うケースは増えており、父親の家事・育児時間は微増傾向にあるが、未だ先進国中最低の水準にとどまっている²⁾。このような中、父親となった男性にも、母親同様に産後うつが認められ³⁻⁵⁾、父親へのメンタルヘルス支援の必要性が報告されている^{6,7)}。

これまでの父親への支援では、各市町村の取り組みにおいて、ママ・パパ教室や父子手帳、父親向けのパンフレットにより育児に関する情報提供等が行われている。岡村⁸⁾によると、父親の大半は、子どもや子育てに関する情報を得る機会として保護者同士の交流を希望している。しかし、父親同士の交流は、新しい人間関係づくりへの躊躇、共通性がない父親と接する難しさ、継続的に交流する機会の少なさ、忙しさなどといった理由から進んでいない⁹⁾。そのため、父親同士の交流は、父親のストレス軽減には結びつかず、メンタルヘルス支援になりにくい。

そのような中、産前・産後のサポート事業の1つとして、出産や子育てに悩む父親の支援が、ピアサポート支援と父親相談支援の2本柱で展開されている¹⁰⁾。この支援事業が父親の産後うつ等の課題解決につながるためには、父親が悩む具体的な状況把握が必要である。本研究の結果は、今後子育てをする父親が自分自身のメンタル

ヘルスに留意しながら育児を遂行していくための支援を検討する一助になると考える。

本研究の目的は、生後2～3か月の児を育てる父親が、日々の生活の中で悩んだ状況について明らかにすることである。

I. 方法

1. 研究デザイン

研究デザインは、質的記述的研究である。

2. 研究参加者

研究参加者は、初めて子育てをしている心身ともに健康な就業している男性とした。参加者の妻は、地方都市にある周産期母子医療センターにて正期産で出産（帝王切開を含む）し、産後の経過が順調で、調査時心身ともに健康な育児休業中の者とした。参加者の児は、生後2～3か月で、出生時正常逸脱なく、調査時も健康である者とした。また、夫婦は婚姻関係にあり、核家族である者とした。対象者の選定は、共同研究者である病棟看護師長が行った。参加者14名の年齢は、20歳代5名、30歳代6名、40歳代3名であった。

3. データ収集方法と分析方法

1) データ収集方法

研究の同意が得られた参加者に対して、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行った。インタビューは、新型コロナウイルス感染症等が危惧されることから、電話インタビューとし、1人につき1回、約30～60分間実施した。インタビュー内容は、承諾を得てICレコーダーに録音した。

データ収集期間は、2022年6月から10月までの4か月間である。

2) データ分析方法

分析は、以下の手順で行った。インタビュー内容を全て書き起こし、逐語録を作成した。逐語録の中から、生後2～3か月の児を育てる父親が日々の生活の中で悩んだ状況に焦点を当て、語りの意味を損なわないよう参加者の表現を残したままの文章として語りを抽出し、意味内容の類似した語りを簡約化してコードとして抽出した。

次にコードの類似性からサブカテゴリーとして統合し、サブカテゴリーの類似性から最終的にカテゴリーとして集約した。

4. 倫理的配慮

研究参加者に、書面にて研究の目的と方法、個人情報保護、匿名性の保障、研究協力の自由意志と途中辞退および研究参加同意後の撤回の自由の保障、研究の公表方法について説明し、同意書への署名をもって参加同意を得た。本研究は、徳島大学病院生命科学・医学系研究倫理審査委員会の承認（承認番号：4345）、当該施設長の実施許可を得て、ヘルシンキ宣言および人を対象とする医学研究に関する倫理指針を遵守し実施した。

II. 結果

生後2～3か月の児を育てる父親が日々の生活の中で悩んだ状況を分析した結果、59の語りから28のコードが抽出され、11のサブカテゴリーから3つのカテゴリーに集約された（表1）。

以下、結果の記述にあたり、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、語りから抽出されたコードを〈 〉、語りを「斜字」で示した。語りの末尾の（ ）内には対象者を区別するアルファベットを記載した。

1. 【日々変化する子どもへの対応】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリーから構成された。生後2～3か月の児を育てる父親は、日々の生活の中で、《子どもに合った対応が分からない》、《体調不良の判断ができない》、《子どもとの外出がスムーズにいかない》、《情報が取捨選択できない》状況に悩んでいた。

父親は、「毎日、子どもの様子に変化があるし、何が嫌で泣いているのかわからず日々悩めます。(A)」、「抱っこしてもおっぱいあげても泣き止まず、何で泣いているのか分かりませんでした。今でも何で泣いているんだろうってずっと考えてますね。(I)」、「おむつ替えて、ミルクやって、抱っこをするしかレパートリーがないので、泣き止まない時にその3つをやった上で、それでも泣き止まないと‘どうしたらいいのか分からん’っていう状

表1 生後2～3か月の児を育てる父親が日々の生活の中で悩んだ状況

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
日々変化する子どもへの対応	子どもに合った対応が分からない	泣き止まない子ども
		飲ませるミルクの量
		向き癖
		体温管理
		おむつからの便漏れ
		爪切り
		便秘
	体調不良の判断ができない	続く嘔吐
		便の色
		少ない哺乳量
	子どもとの外出がスムーズにいかない	計画通りにいかない外出
		不安と緊張の外出
		みつからない預け先
	情報が取捨選択できない	情報の取捨選択
産後の妻との関係	妻への対応が分からない	妻の苛立ち
		心配しすぎる妻
		妻の頑固さ
		妻と仕事との板挟み
	産後の妻の体調に寄り添えない	乳腺炎
		産後のむくみ
		帝王切開後の経過
父親になって変化した生活	十分な睡眠が取れない	睡眠不足
	自分のための時間がない	自宅での作業
		趣味や友達との交流時間
	ストレスのはけ口がない	ストレスのはけ口
	親からのサポートに負担を感じる	義母との関係性
		実母との関係性
	家計に不安を感じる	子どもへの出費

況で。(E)」と、〈泣き止まない子ども〉という《子どもに合った対応が分からない》状況に全員が悩んでいた。また、「ミルク飲ませる量が多すぎたりであったりとか、うまくいかないことはいっぱいありました。(B)」と〈飲ませるミルクの量〉、〈向き癖〉や「部屋を涼しくすると子どもの体が冷えているのかと思い、長袖を着せましたが、子どもは暑かったみたいで、泣き止まず、難しいなと思いました。子どもの体温管理はちょっと難しかったというか、今もあまりわかってないんですけど。(D)」〈体温管理〉、「子どもの便の量が多くておむつから漏れて服について結構困っています。ネットには横向きにすると便が漏れるって書いてるんですけど、授乳の時は横

向きにせざるを得ないので、対応策がすごく難しいです。

(H)」と〈おむつからの便漏れ〉や〈爪切り〉、「最近便秘なのでどうやったらウンチ出るのかなって、足動かしてあげたりとかしていますが、困っています。(A)」と〈便秘〉という《子どもに合った対応が分からない》状況に悩んでいた。

また、「一時期、子どもがよく吐くことがありました。ネットで調べると食道がストレートなので吐きやすいと書いていて、吐くのが続くようになった時には“大丈夫かな”ととても心配しましたが、ある時期を過ぎると落ち着いた感じです。(L)」と、〈続く嘔吐〉、〈便の色〉や〈少ない哺乳量〉という《体調不良の判断ができない》状況

や、「出かける準備が終わってさあ行こうかって時に子どもが吐いちゃったり、ある程度予定を決めても大幅に予定が狂うことがありますね。(G)」と〈計画通りにいかない外出〉、「外に出る時は覚悟がいると言うか、子どもをチャイルドシートに乗せるのも“上手くいくかな”から始まって、外での滞在時間もどれくらいで切り上げて帰ろうとか、外に出るのは近場ならいいんですけど、遠くに行くとかちょっと長めの用事がある時は“大丈夫かな”って緊張しますね。(H)」と〈不安と緊張の外出〉、「平日の昼間に子どもを病院に連れていくのに妻ひとりでは行けないし、仕事の調整ができず対応できない時もあるので、両親も近くにいないくて、状況的に悩みますね。(N)」と〈みつからない預け先〉という〈子どもとの外出がスムーズにいかない〉状況に悩んでいた。

さらに、「言う人言う人によってやり方が違うんですよ。きっとそれは上手にやってきた経験から話してくれてるんですけど、どれを取り入れるかというのが難しいですね。(J)」、「二人とも知識がないのでどちらが正しいんだろうって迷うことがありましたね。(M)」と、〈情報の取捨選択〉という〈情報が取捨選択できない〉ことに悩んでいた。

2. 【産後の妻との関係】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリーから構成された。生後2～3か月の児を育てる父親は、日々の生活の中で、〈妻への対応が分からない〉、〈産後の妻の体調に寄り添えない〉状況に悩んでいた。

父親は、「奥さんがちょっと怒っているみたいな感じで、言いたいことが言えないし、奥さんのメンタルケア的なのをどうしたらいいのかなあと悩みます。(A)」、「妻が悩んでいたりと、大変でどうしてもイライラしてたり、その状態自体がストレスになってくるみたいな感じですよ。(H)」、「子どもの面倒みてるときに、どうしてもうたた寝とかしちゃうと、“ちゃんとみててよ”と言われることがあります。妻も平日育児で疲れているでしょうから、ちょっと申し訳ないなって思うんですけど、僕も仕事で疲れてる所もあって何とも言えないなというところですよ。もう少しすると楽になると思うので現状耐えているしかないかなといったところですね。(N)」、「抱っこをするときの持ち方とか力加減が、“強くない？”とか

‘扱い荒くない？’みたいな感じで嫁さんに怒られます。(E)」という〈妻の苛立ち〉や「僕はそこまで思ってもなくても妻の方が悩んだり、妻のフォローをどうすればいいのか分からなかったり“うまく対応できないな”とか思ったりするんですよ。(H)」という〈心配しすぎる妻〉、「奥さんは“子育てはきちんとしなくてはって、病院に言われた通りにして、本とかに載ってるようにした方がいいだろう”っていうかっちりしている感じの人で、僕は雑把にやっても大丈夫っていうのがあって、考え方の違いがありますね。そのすり合わせがうまくいなくてうーん困ったなってなることがありますね。(K)」という〈妻の頑固さ〉、「もう少し子どもと関わる時間を作って欲しいと言われましたが、仕事はかなり忙しくて、帰宅が夜中の12時をこえると結構あるので、子どもと関わる時間を作ろうと思ってもなかなか時間のコントロールができないので厳しいなと思います。(M)」と〈妻と仕事との板挟み〉という、〈妻への対応が分からない〉状況に悩んでいた。

また、「妻が乳腺炎になりかけたことがあって、正直全く分からないし、自分でも経験しようがないので、妻が辛いって言ったら病院連れて行くことはできますけど、それ以上のことはできないので歯痒いなって感じがします。(N)」という〈乳腺炎〉や、〈産後のむくみ〉、「妻は、帝王切開の傷口がかゆいとか、出血が少しだけと続いているみたいで大丈夫なのかなとは思いますが。退院後は、不安そうな感じが見られたのですが、自分にはどうしようもなく。(L)」と〈帝王切開後の経過〉という〈産後の妻の体調に寄り添えない〉状況に悩んでいた。

3. 【父親になって変化した生活】

このカテゴリーは、5つのサブカテゴリーから構成された。生後2～3か月の児を育てる父親は、日々の生活の中で、〈十分な睡眠が取れない〉、〈自分のための時間がない〉、〈ストレスのはけ口がない〉、〈親からのサポートに負担を感じる〉、〈家計に不安を感じる〉状況に悩んでいた。

父親は、「どのようにして自分の睡眠時間を確保して仕事と育児や家事とを両立させようとか、仕事に支障をきたさないようにしようとか思ってますが、寝れないという気分的な面から、仕事行くのしんどいなあと

思うことがあります。(J)」,「1番困ってるのは、自分が寝たくても寝れないところです。(G)」と〈睡眠不足〉という《十分な睡眠が取れない》状況や、「何か作業をしてても子どもが泣いたら子どもの様子を見たりとかするので、集中してなにか作業をやるっていう時間がまとまって取れなくなった(D)」と〈自宅での作業〉や、「友人を呼んでちょっとダラダラしたいけど葛藤ですね。(K)」,「妻が育児してるのを差し置いて、自分だけ本を読むことはできないので仕方ないですね。読みたい本も溜まっているので、なかなか時間が取れなくてしんどいなって思います。(N)」と〈趣味や友達との交流時間〉という《自分のための時間がない》状況に悩んでいた。

「子どもが生まれる前までは、職場であったことなどを話してストレス発散みたいなのがあったんですけど、育児をしている妻に一方的に仕事の話をするのも気が引けるなあと思って控えています、はけ口がなくなってストレスが溜まっている気がします。(N)」と〈ストレスのはけ口〉という《ストレスのはけ口がない》状況、「奥さんの退院後、義理の母親が手伝いに来てくれていましたが、そんな長い時間義理のお母さんと一緒にいる時間がなかったので、義理のお母さんとの接し方が一番困りました。(B)」と〈義母との関係性〉や、「子どもの面倒を見てもらうために、実母に会う機会が増えたことで、イライラすることが増えましたね。(E)」と〈実母との関係性〉という《親からのサポートに負担を感じる》状況に悩んでいた。

また、「赤ちゃんの物でも結構値段が張るなって思ったり、やっぱり人が1人増えると家計にも関わってくるので、以前よりもしっかりしていかなきゃいけないときがありますね。(K)」と〈子どもへの出費〉という《家計に不安を感じる》状況に悩んでいた。

Ⅲ. 考察

本調査は、父親の在宅時間が長くなった¹¹⁾ コロナ禍における調査であったことから、休日は1日中家族3人で生活をしており、それゆえに父親が日々の生活の中で悩んだ状況がより具体的に語られた。

1. 日々変化する子どもへの対応に悩む父親

子どもが日々変化の中で〈泣き止まない子ども〉に対応できないことに、すべての参加者が悩んでいた。子どもの泣きは親の養育行動を引き出すシグナルであるが、母親は児の泣きに対して思い通りに対処しなければいけないと認識し、泣きに対処できない場合には困難な思いを抱いている^{12,13)}。父親も同様に〈泣き止まない子ども〉に対応できないことに悩んでいた。一方、小山ら¹⁴⁾は、父親は、赤ちゃんは泣くものとの認識を示しており、それは父親が、二次的養育者であって何かあったら母親が対処してくれると母親に依存していることによると報告している。父親は、「何で泣いているんだろうってずっと考えてますね」と、泣きの理由を考えたり、「おむつ替えて、ミルクやって、抱っこをするしかレパートリーがないので、泣き止まない時にその3つをやった上で、それでも泣き止まない」と泣き止ませようとしたりしている語りから、育児に積極的に取り組んでいる様子が伺えた。児の泣きはストレスになり、育児が辛いと感じ¹⁵⁾、虐待に繋がる¹⁶⁾ことが報告されている。児の泣きを分析するアプリも開発され、その背景には多くの親が児の泣きへの対処に困っている状況が見受けられる。

父親は、〈泣き止まない子ども〉以外の状況でも《子どもに合った対応が分からない》ことや、《体調不良の判断ができない》ことに悩んでおり、父親がわからないことや判断できない具体的な内容が提示できた。

また、《子どもとの外出がスムーズにいかない》状況は、計画していても予想外の事態が生じ〈計画通りにいかない外出〉、子どもを連れての〈不安と緊張の外出〉、子どもを預けたいが〈みつからない預け先〉といった状況に悩みを抱えていた。児の泣きや外出がスムーズにいかないといった自分の思うように事態が進まないことに対する認知がネガティブなものにならないような心の余裕の作り方と、対処能力が求められる。そして、「ネットには」や「ネットで調べると」という語りがいくつも見られ、「二人とも知識がないのでどちらが正しいんだろうって迷うことができましたね」と言うように、夫婦共に初めての子育てであり、インターネットから直ちに情報は得られるが、《情報が取捨選択できない》状況にあった。〈飲ませるミルクの量〉〈向き癖〉〈体温管理〉〈おむつからの便漏れ〉〈爪切り〉〈便秘〉や、〈続く

嘔吐〉〈便の色〉〈少ない哺乳量〉という具体的な悩みごととは、専門職者から正確な情報を知識提供すべき項目として父親支援に活かせるものと思われる。

2. 産後の妻との関係に悩む父親

〈妻の苛立ち〉という妻の様子は、父親の育児に対する不満の表れであり、〈心配しすぎる妻〉〈妻の頑固さ〉と共に妻のメンタルヘルス状態を表していると思われる。「奥さんがちょっと怒っているみたいな感じで」、「抱っこをするときの持ち方とか力加減」、「洗濯しても靴下が裏返し」、「うたた寝」と、何から何まで「怒られる」状況が語られた。夫の家事・育児参画では、妻の期待が満たされるほど満足度が高くなる¹⁷⁾。妻が満足する育児方法や家事の仕方は、それぞれの夫婦において異なることから、妻の満足を得るためには出産前からの準備練習が必要である。さらに、父親のメンタルヘルスには母親のメンタルヘルスが影響し、母親のメンタルヘルスには父親の育児に対する母親の満足度が影響する¹⁸⁾。このような妻の状況に対し、父親は、「言いたいことが言えない」、「妻が悩んでいたりと、大変でどうしてもイライラしてたりその状態自体がストレスになってくる」、「現状耐えているしかないかな」と語っており、父親のメンタルヘルスに影響するのではないかと心配される。父親は、仕事に生活の重きをおかなければならない状況にあり¹⁹⁾ながら、限られた時間の中で育児や家事を行うため、〈妻と仕事との板挟み〉になっている状況も語られ、〈妻への対応が分からない〉状況に悩んでいた。

このような悩みを抱えながらも父親は、妻の〈乳腺炎〉や〈産後のむくみ〉〈帝王切開後の経過〉を心配し、〈産後の妻の体調に寄り添えない〉ことにも悩んでいた。父親は、「自分にはどうしようもなく」と自分の無力さを語っている。産後の母親となった女性への夫からのサポートの重要性は、多数報告されている²⁰⁻²²⁾。夫は妻にサポートを受ける役割であり、サポートを受ける妻とのサポート授受関係が、夫婦のメンタルヘルスひいては夫婦関係に影響を与えられる。産後の母親には、健診や産後ケア事業という支援が展開されているが、父親となった男性へのケアシステムの構築が求められる。

3. 父親になって変化した生活に悩む父親

父親は、〈十分な睡眠が取れない〉ことや、〈自分のための時間がない〉、〈ストレスのはけ口がない〉、〈親からのサポートに負担を感じる〉こと、そして〈家計に不安を感じる〉ことに悩んでいた。親になる過程には、自由の喪失²³⁾がみられ、父親母親共に親役割への肯定的・否定的意識や夫婦関係満足度と関係している²⁴⁾。父親は、「寝たくても寝れない」ことによる〈睡眠不足〉、〈自宅での作業〉や〈趣味や友達との交流時間〉が制約され、「しんどいな」、「葛藤ですね」と捉えていた。それに加えて「ストレスが溜まっている気がします」と〈ストレスのはけ口〉がなく、これまでになかった経験にストレスを感じていた。父親の産後のメンタルヘルスへの影響要因の1つにサポート不足がある²⁵⁾。母親にサポートが必要なように父親にもサポートが必要であるが、〈趣味や友達との交流時間〉の制約は、趣味によるストレス軽減効果や友達からのサポートの減少につながり、〈ストレスのはけ口〉も遮断されることになることが危惧される。〈義母との関係性〉〈実母との関係性〉という〈親からのサポートに負担を感じる〉状況は、妻にはサポートとなっているが、自分にはストレスとなっており、【父親になって変化した生活】に悩む父親のメンタルヘルスに影響するものと思われる。さらに、〈子どもへの出費〉が増え〈家計に不安を感じる〉状況は、理想の子ども数をもたない理由²⁶⁾や育児休業を利用しなかった理由²⁷⁾である経済的理由の現状を表出している。少子化対策としてさまざまな子育て支援が制度化されてきた。中でも経済的負担の増加に対する支援は、育児休業給付金をはじめ児童手当など充実が図られ、2030年度には男性の育児休業取得率を85%まで引き上げるという目標が掲げられたが、父親となった男性のストレス要因とメンタルヘルスへの影響を考慮した支援展開が求められる。

4. 日々の生活の中で悩む父親の特徴

生後2～3か月の児を育てる父親が、日々の生活の中で悩んだ状況は、【日々変化する子どもへの対応】、【産後の妻との関係】、【父親になって変化した生活】であった。父親の初めての多様で複雑な経験は、他の国においても同様な結果が得られており、初めて父親となった男性は、ライフスタイルを変化させ、自分のニーズよりもパート

ナーや子どものニーズを優先させ、睡眠不足で自分のための時間がほとんどなく、家族を養わなければならないという疲労とプレッシャーからストレスを生じていた²⁸⁾。また、産後の母親が悩む状況と類似の内容でもあった。しかし、自由の喪失という点においては、子育ては母親の役割という性別分担意識や、母親の家庭責任意識²⁹⁾が垣間見られ、母親を対象とした研究では、育児不安や育児困難感、育児ストレスというワードで子どもとの関わりの中での困難な状況が数多く報告されているが、その中には産後まもない時期において《自分のための時間がない》ことを悩む記述は見当たらない。《自分のための時間がない》ことは、3か月、3歳児、保育園児等を持つ母親を対象とした調査³⁰⁾でみられており、産後まもない時期の母親は、子どもと自分の体調や家事のことで精一杯という状況にある。その母親を支える父親への産前・産後のサポート事業の1つとして、子育てに悩む父親支援事業が2021年度から開始され、ピアサポート支援と父親相談支援の2本柱で展開されている。本研究結果で示された父親が悩む具体的な状況は、父親支援に貢献するものと思われる。

さらに子育ては、夫婦の相互理解と協働が重要であることから、日々の生活の中で悩んだ状況は、妻が夫を理解する一助となり、時間的余裕が持てない子育ての日々の中で、家族の調和が図られていくものと思われる。

5. 研究の限界と課題

生後2～3か月の児を育てる父親が、日々の生活の中で悩んだ3つの状況が示されたが、この状況がどの程度メンタルヘルスと関連するかは判断できない。

今後は、家事育児をよくやっていると自負する者とそうでない者との悩んだ状況の違いや、悩んだ状況とメンタルヘルスとの関係を量的な調査で明らかにしていくことが必要である。

さらに、産後のメンタルヘルスは、夫婦互いのメンタルヘルスに影響することから、夫婦単位で日々の生活の中で悩んだ状況を調査することで、その夫婦の調和状況が確認できると思われる。

IV. 結論

生後2～3か月の児を育てる父親は、日々の生活の中で、【日々変化する子どもへの対応】、【産後の妻との関係】、【父親になって変化した生活】に悩んでいた。本研究結果で示された父親が悩む具体的な状況は、子育てをする父親が自分自身のメンタルヘルスに留意しながら育児を遂行していくための一助になると共に、子育てに悩む父親支援事業の展開に貢献するものと思われる。

謝 辞

本研究にご協力くださいました研究参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反

開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 内閣府男女共同参画局：令和3年度男女共同参画白書。コロナ下で顕在化した男女共同参画の課題と未来。2021。
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r03/zentai/pdf/r03_tokusyu.pdf (2024年8月10日アクセス)
- 2) 内閣府男女共同参画局：「平成28年社会生活基本調査」の結果から～男性の育児・家事関連時間～。
https://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_42/pdf/sl-2.pdf (2024年8月10日アクセス)
- 3) 竹原健二，須藤茉衣子：父親の産後うつ。小児保健研究, 72(3)：343-349, 2012
- 4) デッカー清美，神原祐美，丸山昭子，大澤優子 他：産後1年未満の父親の抑うつの実態とその要因。医学と生物学, 161(1)：1-8, 2021
- 5) Tokumitsu, K., Sugawara, N., Maruo, K., Suzuki, T., *et al.*: Prevalence of perinatal depression among Japanese men: A meta-analysis. *Annals of General Psychiatry*, 19(1)：1-11, 2020

- 6) 竹原健二：父親の産前・産後のうつの実態とその支援. 医学書院, 週刊医学会新聞 (看護号), 2021
https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2021/3405_02 (2024年8月10日アクセス)
- 7) 小山里織, 島谷康司, 鳩野愛, 森山雅子：父親の育児支援プログラムの確立を目指した育児講座の提案. 人間と科学, 県立広島大学保健福祉学部誌, 17(1) : 23-29, 2017
- 8) 岡村泰敬：保育所保育士に求められている父親への子育て支援に関する研究—父親へのインタビュー調査から—. 東洋大学大学院紀要, 57 : 157-172, 2021
- 9) 松本しのぶ：地域における父親同士の交流を促進する支援：子育て支援プログラム参加者に対するグループインタビュー調査から. 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要, 54 : 227-236, 2016
- 10) 厚生労働省：令和5年度母子保健対策関係概算要求の概要, 2023
<https://www.mhlw.go.jp/content/11908000/000991932.pdf> (2024年11月12日アクセス)
- 11) 厚生労働省：令和3年版 厚生労働白書, 2021
<https://www.mhlw.go.jp/content/001011736.pdf> (2024年8月10日アクセス)
- 12) 田淵紀子：新生児の泣き声に対する母親の反応. 日本助産学会誌, 12(2) : 32-44, 1999
- 13) 堀越摂子, 常盤洋子, 國清恭子, 高津三枝子：生後1か月児の泣きに関する母親の認識. 北関東医学, 66(1) : 23-30, 2016
- 14) 小山里織, 森山雅子, 小林佐知子, 小原倫子 他：乳児の泣きに対する父親の認知プロセスの特徴—夫婦の情報共有との関連から—. 健康科学研究, 3(2) : 75-88, 2019
- 15) 夏山洋子, 矢野恵子：乳児の「泣き」に対する母親の対処行動に関する調査. 明治国際医療大学誌, 15 : 1-9, 2016
- 16) 笹川宏樹：児童虐待の現状とリスク要因. 心理臨床科学, 9(1) : 31-38, 2019
- 17) 李基平：夫の家事参加と妻の夫婦関係満足度—妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して—. 家族社会学研究, 20(1) : 70-80, 2008
- 18) 大関信子, 大井けい子, 佐藤愛, 池田礼美：乳幼児を持つ母親のメンタルヘルス：父親のメンタルヘルスと関連要因. 女性心身医学, 18(2) : 248-255, 2013
- 19) 多喜代健吾, 北宮千秋：父親の育児参加への育児参加要因およびソーシャルサポートの影響. 日本看護研究学会雑誌, 42(4) : 763-773, 2019
- 20) 添田梨香, 上田公代：妊娠中のストレスとストレス対処に関する研究. 女性心身医学, 21(3) : 306-313, 2017
- 21) 岡未奈, 佐々木睦子, 石上悦子：パートナーからの情緒的サポートに対する産後1か月の初産婦の思い. 香川大学看護学雑誌, 23(3) : 1-10, 2019
- 22) Yamada, A., Isumi, A., Fujiwara, T.: Association between Lack of Social Support from Partner or Others and Postpartum Depression among Japanese Mothers : A Population-Based Cross-Sectional Study. International Journal of Environmental Research and Public Health., 17(12) : 4270, 2020
- 23) 西尾敏, 中津郁子：父親となる発達過程における「自由の制限」と親役割意識. 小児保健研究, 71(1) : 67-73, 2012
- 24) 森下葉子：父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, 17(2) : 182-192, 2006
- 25) Obikane, E., Nishi, D., Morisaki, N., Tabuchi, T.: Risk factors of paternal perinatal depression during the COVID-19 pandemic in Japan. Journal of Psychosomatic Obstetrics & Gynecology., 44(1) : Article2245556, 2023
- 26) 国立社会保障・人口問題研究所：現代日本の結婚と出産—第16回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書. 調査研究報告資料, 40 : 74-76, 2023
- 27) 日本能率協会総合研究所：厚生労働省委託事業 仕事と育児等の両立に関するアンケート調査報告書. 140-141, 2022
- 28) Baldwin, S., Malone, M., Sandall, J., Bick, D.: A qualitative exploratory study of UK first-time fathers' experiences, mental health and wellbeing needs during their transition to fatherhood. British

- Medical Journal., 9(9) : e030792, 2019
- 29) 中川まり : 子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加. 家族社会学研究, 22(2) : 201-212, 2010
- 30) 前田薫, 中北裕子 : 乳幼児をもつ母親の育児ストレスの要因に関する文献検討. 三重県立看護大学, 21 : 97-108, 2017

Concerns in daily life of fathers of 2- to 3-month-old infants

Maria Houzaki¹⁾, Mari Haku²⁾, Keiko Takebayashi²⁾, Hiroko Sato²⁾, and Hiromi Moriuchi³⁾

¹⁾*Master's Course in Practical Midwifery, Graduate School of Health Sciences, Tokushima University, Tokushima, Japan
(Graduation in 2024.3)*

²⁾*Department of Midwifery, Institute of Biomedical Sciences, Tokushima University, Tokushima, Japan*

³⁾*Department of Nursing, Tokushima University Hospital, Tokushima, Japan*

SUMMARY

Objective : The aim of this study was to reveal the concerns in daily life of fathers of 2- to 3-month-old infants.

Methods : The participants in this study were husbands in households with 2- to 3-month-old infants. Semi-structured interviews were conducted by telephone using an interview guide and qualitative descriptive analysis was conducted.

Results : There were 14 participants. Three categories were revealed : (1) how to deal with the child who was changing day by day, (2) the relationship with the wife after childbirth, and (3) changed daily life after becoming a father.

Conclusions : The specific situations indicated by the results of this study regarding the concerns of fathers are expected to aid them in carrying out childcare while being mindful of their mental health, as well as contribute to the development of support programs for fathers who are struggling with parenting. Since mutual understanding and cooperation between the husband and wife are important in child-rearing, the results of this study revealed the situations in daily life for which a father of 2- to 3-month-old infants has concerns should be helpful for the wife to understand her husband's feelings and should contribute to the achievement of harmony in the family in times of child-rearing when the husband and wife are busy.

Key words : father, child rearing, concern